

(6)

CURES NEWSLETTER

あり、地下水のくみ上げによる地盤沈下で、堤防が弱くなり、洪水の危険性が増しているそうです。

特に、1970-80年代に産業地区の発展と分散化（郊外化）により水・交通問題が深刻となり、中心部に立地していた工場は地価と税金の安い郊外に土地を求め、工場・設備の更新により爆発的に成長を遂げ、周辺のComuneも税源（不動産税）が豊かになるので企業進出を歓迎しました。この結果、ボローニャ市の人口は1935年250,000人—1971年500,000人—1998年380,000人と一旦集中が進んだが、近年は都心の空洞化の傾向にあり、公共交通機関よりもマイカーによる通勤が一般化してしまったのです。

そこで、メトロポリタン計画では広域的な水の管理と緑地の配置、交通機関の整備と財

源調整を行うことにしており、都市の質を高めるための広域的な環境管理計画がメトロポリタン計画に求められているのです。ややもするとグローバル競争の掛け声で開発に走るコムーネをメトロポリタン計画によって規制し、持続的発展に導こうとしているようです。友人のカベッキ教授によると環境管理計画は新しい産業育成の観点からも積極的に取り組まれており、EUからの補助金によって地元企業が開発した、大気汚染状態を測定するシステムや農業用の地域的降雨情報システムなどがすでに効果を上げているそうです。

以上、クリエイティブでサステナブルな地域に向けて、新しい課題に挑戦しているのが最近のボローニャです。

（金沢大学経済学部教授）



進化経済学とは何か

鄭 承 衍

「国際貿易の現実および理論において技術進化の問題はどう扱われるべきか」ということは、私のこれまでの大きな研究テーマであった。私が技術進化の問題に関心を持つようになったのは、京大大学院在学時の指導教官だった瀬地山敏教授からの影響によるところが大きい。欧米に続いて1997年に設立された日本進化経済学会の立役者の一人でもあった同教授の影響で、私は様々な経済界の進化の中でとりわけ技術の進化について取り組むようになった。ここでは、日本の経済学界で

はまだ新しい「進化経済学」について簡単に紹介しておきたい。

『進化経済学とは何か』（進化経済学会編、有斐閣、1998）のなかで瀬地山教授は「進化経済学の新しさは、一言でいえば、諸システムが経過する‘時間’と諸システムがおかれている‘空間’の再発見である。最適性の存在を前提にして行動するというシステム観や、それらの行動が結果すると期待されている均衡の概念は、システムが埋め込まれている現実世界の(actual)な時間と空間とを欠いてい

る」と述べている。ある経路から別の経路へ移るプロセスを描こうとする考え方や、おかれている空間を画一化された行動原理ではなく複数のシステムが競合・共生している空間として捉えようとする考え方は、多様な種で構成される生物社会の研究に用いられる進化 (evolution) の概念に対応している。

こうした進化の考え方は、企業行動や経済成長から制度・資本主義の進化に至るまでの様々な研究領域で幅広く使われてきた。例えば、アメリカの Nelson 教授と Winter 教授による名著 *An Evolutionary Theory of Economic Change* (Harvard Univ. Press, 1982) では、企業意思決定における「満足化 (satisficing) ルール」や企業の繰り返される行動パターンの意味を持つ「ルーティン (routine)」などによる企業行動が分析されている。この本の中でとりわけ興味深いのは、進化論的成長モデルによる理論・計量分析の結果、新古典派経済学によって構築された有名な「定型化された事実 (stylized facts)」と非常に似通った結果が導かれたということである。これに対して、新古典派に属する経済学者たちは「同じ結果が導かれるなら、何が新しいか」と反論するかも知れない。しかし、この分析を通じて Nelson 教授と Winter 教授が本当に言いたかったの

は、同じ結果が導かれてもその結果を導くまでの分析プロセスは現実をより充実に反映したものでなければならない、ということであろう。

さらに、代表的な進化経済学史家である Hodgson 教授は『進化する資本主義』(横川信治編、日本評論社、1999) で、「制度的な組み合わせの潜在的な多様性、経路依存の現実性、累積的因果関係を所与とすると、制度と形態の驚くほどの種類が存在しうる」と述べ、現代の資本主義にみられる多様性を指摘している。現実をみても、英米流の資本主義から日本の資本主義、東アジアの資本主義まで、今日の世界は「資本主義」という一言ではカバーできなくなりつつある。今回の東アジアの通貨・金融危機に対する処方箋として IMF がとったアメリカ流の対応が批判されているのは、こうした経済システムの多様性を考慮しなかったからであろう。最近の進化経済学者たちが生物学だけではなく物理学や社会心理学などの様々な学問的要素を取り入れて学際的な研究を活発にしているのは、今日の経済システムの多様性と複雑性の究明により積極的に取り組もうとする姿として評価されるだろう。

(金沢大学経済学部講師)

“粋 な 町 工 場”

田 口 直 樹

東大阪にある小さな町工場。社長と奥さん、パートさん3人の典型的な零細ねじ屋さんがある。そんなちっちゃな町工場が世間から注目されている。

“オレ達ネジの心の底からの叫びを聞いてくれ!”

～オレ達、ネジがこの世に存在しなければ、この世のほとんどすべての製品は、成り立た